

# JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

September 30, 2018 No.11

## JACET 関東支部ニューズレター第 11 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版第 11 号) をお届け致します。関東支部ニューズレター委員会委員長の佐野富士子先生 (常葉大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする委員会委員の先生方の不断のご尽力に衷心より御礼申し上げます。2013 年度より学術研究発表は、「関東支部紀要」(JACET-KANTO Journal) (委員長: 伊東弥香先生 (東海大学)、副委員長: 小田眞幸先生 (玉川大学) に掲載し、支部活動報告全般については、本「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回刊行) に掲載しております。「紀要」と「ニューズレター」は車の両輪の如くそれぞれの責任を果たしながら相互補完的な関係を維持し関東支部の重要なメディアとして機能しています。本号は 2018 年度の第 1 回目 (通算第 11 回目) のニューズレターとなります。

第 11 回 (2018 年度) JACET 関東支部大会は、

神田外語大学の後援を得て、2018 年 7 月 8 日 (日) 同大学幕張キャンパスにて、「英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性 (Challenges and Possibilities of Active Learning in English Language Education)」を大会テーマとして開催されました。この大会テーマは、2017 年第 56 回 JACET 国際大会 (於青山学院大学) 開催時に於ける関東支部特別企画「学習とは？」で扱った「アクティブラーニング」に特化した講演 (溝上慎一氏: 京都大学教授) とシンポジウム (中野美知子氏: 早稲田大学名誉教授) (森田正康氏: ヒトメディア CEO) (溝上氏) への大きな反響を受け、さらに深い学びを得るため特別に企画したものです。基調講演には、「OECD Education2030」日本代表を務める白水始氏 (東京大学 高大接続研究開発センター教授) を御迎えし、改めてアクティブラーニングの課題と可能

### 目次

・ 巻頭言 支部長 木村松雄 ..... - 1 -	・ 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告 支部研究企画委員 飯田敦史 支部研究企画委員 辻りこ ..... -13-
・ 第 11 回関東支部大会報告 支部大会運営委員長 新井巧磨 ..... - 2 -	・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長 伊東弥香 ..... -15
・ 第 1 回支部総会報告 支部事務局幹事 高木亜希子 ..... -10-	・ 事務局だより 支部事務局幹事 高木亜希子 ..... -16-
・ 月例研究会報告 月例研究委員会委員長 山本成代 月例研究委員会副委員長 奥切恵 辻りこ ..... -12-	

性についてお話し頂きました。2年に亙る同一テーマによる講演等を企画し感じたことは、英語教育全体が、「学習中心主義 (Learning-centered)」に収斂されつつあるということでした。理想とする「学習 (Learning)」は今後 AI や AR の進捗に伴い大きく変容していくことが想定されますが、それではなかなか育ちにくいとされる異文化間能力の育成の議論を一方で行いながら、「教師」(この用語ももう古いのかも知れませんが)と学習者それぞれが、どのように関わり合いながら「学習」を進展させていくかが今後の大きな課題ではないかと思われまます。

本支部大会開催に当たっては、大会運営委員長(新井巧磨先生:早稲田大学)、同副委員長(飯田敦史先生:群馬大学)、大会実行委員長(伊藤泰子先生:神田外語大学)、大会審査委員会委員長(斎藤早苗先生:東海大学)、同副委員長(川口恵子先生:芝浦工業大学)、を中核として、多くの先生方よりご支援・ご協力を頂きました。会場を無償でお貸し下さり、なお周到な準備と結束力で本大会を成功に導いて下さった伊藤泰子先生を核とする神田外語大学の先生方・職員の皆さまには特に衷心より御礼申し上げる次第です。またいつも支部運営全般においてご尽力頂いている副支部長(笹島茂先生:東洋英和女学院大学)、副支部長(藤尾美佐先生:東洋大学)、支部事務局幹事(高木亜希子先生:青山学院大学)、支部幹事(山口高領先生:立教女学院短期大学)、同(伊東弥香先生:東海大学)、同(奥切恵先生:聖心女子大学)、同(新井巧磨先生:早稲田大学)、同(山本成代先生:創価大学)、同(飯田敦史先生:群馬大学)の皆様に衷心より御礼を申し上げます。

JACET 関東支部特別研究プロジェクト「英語教育に関する自治体の研究テーマに関する調査」「英語教員養成コア・カリキュラムに関する調査」へのご回答誠に有難うございます。どちらも50%に近い回収率を得て、現在鋭意分析中です。

今後、JAAL in JACET 学術交流集会(12月1日)、『関東支部紀要』、『英語教育』(大修館書店)等で発表する予定です。どうぞご期待ください。

JACET 関東支部 2018 年度後半の活動へのご理解とご協力を何卒宜しく御願ひ申し上げます。

## 第 11 回関東支部大会報告

支部大会運営委員長

新井巧磨 (早稲田大学)

第 11 回 (2018 年度) JACET 関東支部大会が、「英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性 (Challenges and Possibilities of Active Learning in English Language Education)」を大会テーマとし、7月8日(日)に、神田外語大学の後援を得て同大学の幕張キャンパスにて開催されました。基調講演には白水始氏(東京大学 高大接続研究開発センター教授)をお迎えし、大会テーマと同じ演題の下、お話しして頂きました。さらに、今回は「関東支部企画ワークショップ」や「開催校企画 (KUIS Hours)」を設け、アクティブラーニングに関わる発表を複数実施致しました。この他、アクティブラーニング関連の研究発表や実践報告、賛助会員発表も多数行われ、そのうえ好天に恵まれたこともあり、150 名以上の方々にご参加頂くことができました。また、運営においては、大会実行委員長の伊藤泰子先生を中心に、神田外語大学の先生方・学生アルバイトの皆様にも多大なるご尽力を賜り、おかげさまで例年以上に円滑な大会とすることができました。ここに改めまして厚く御礼申し上げます。

来年度の支部大会会場は未定ですが、本年度と同時期にて開催される予定です。より大勢の方々にご来場頂き、一層ご満足頂けるようなものにしていければと存じます。

以下は、各発表の後記です。司会の先生方にご

執筆頂きました。ご協力に心より感謝申し上げます。なお、賛助会員発表やキャンセルのあった発表は後記の記載がございません。

## ■研究発表・実践報告・ワークショップ■

### #01. 関東支部企画ワークショップ 09:30~10:35 Promoting Active Learning In and Out of the Classroom

Murphey, Tim (Kanda University of  
International Studies)  
Deacon, Brad (Nanzan University)

本発表では、Active Learning (以下 AL と表記) を支える理論や条件が示され、学生が期待する AL の内実がリサーチ結果と共に明らかにされた。また、学生のより主体的な関わりを促す教室内外で応用可能な AL の様々な手法について、参加者は体験と実例を通して学ぶ機会を得た。お二人の講師の見事なチームワークと参加者同士の活発なやりとりを中心に進められたワークショップは、授業における AL の更なる可能性を示唆する大変興味深い内容となった。

(吉住香織・神田外語大学)

### #02. 開催校企画 KUIS Hours 10:45~11:50 Empowering Students through Autonomy: How KUIS Encourages Life-Long Self-Directed Learning

Watkins, Satoko (Kanda University of  
International Studies)  
Curry, Neil (Kanda University of  
International Studies)

Ms. Watkins and Mr. Curry from Kanda University of International Studies (KUIS) introduced their training programs in their self-access learning center (namely, SALC) to

the audience which aim to promote KUIS students' self-directed learning skills. They provided background information as to their center and detailed what roles they are expected to play as learning advisors. They also talked about how they train their student staff and volunteers so that they can play a role of peer supporter with the ownership of the programs the center provides. They emphasized the importance of promoting metacognitive thinking for learners to be reflective and self-directed in their own learning processes. A number of hands-on advising sessions were accompanied to help the audience better understand the issues involved in actual advising sessions. After the presentation was over, several questions were raised from the audience, one of which concerns the possibility of applying learner training to the high school context in Japan. The presenters suggested that the topic of learner training be included in the teacher training programs. Once the teachers recognize the value of learner training, there will be more efforts to realize it in their classrooms, and such recognition will eventually lead them to seek further professional training for learner advising.

(Siwon Park; Kanda University of  
International Studies)

### #03. 関東支部企画ワークショップ 09:30~10:35 アクティブ・ラーニングの実際：音声指導を中心に

How to Incorporate AL into English  
Pronunciation Teaching

田邊祐司 (専修大学)

中学生や高校生にどのような音声指導を行えば効果的かということに関して、具体的な方法（e.g. 同じ母音を使っている単語をたどりゴールを目指す「発音迷路」や、単語と文のリズムが同じものを選ぶといったタスク）を実際に聴衆が体験しながらのご講演でしたので、会場が大いに盛り上がりました。教師が「教え込む」のではなく、「つかませること」が重要とのお言葉が印象的でした。

（米山明日香・青山学院大学）

#04. 関東支部企画ワークショップ 10:45～11:50  
英語授業におけるアクティブラーニングの事前準備と実践

Preparation and Practice for Active Learning in English Class

下山幸成（東洋学園大学）

事前準備も重要であるが、授業内での生徒の反応を見ながら軌道修正も重要であること、生徒が「面白そう」「やりがいがある」「やればできそう」「やってよかった」と思えるような授業を行い、それに対する生徒からのフィードバックを大切にすることなどがアクティブラーニングにおいて必要だと述べられた。下山先生らしい熱意溢れるご講演となったことは言うまでもなく、会場は盛り上がった。

（米山明日香・青山学院大学）

#05. 実践報告 09:30～10:00

Integrating Aspects of Active Learning in CLIL: A Report on German Studies in English

Crawford, Michael (Dokkyo University)

獨協大学外国語学部ドイツ語学科の学生を対象に行った CLIL 授業の実践報告であった。学生のプレゼンテーション、ジグソーやインフォメーションギャップなど、アクティブラーニングを中

心とした CLIL の授業展開は参考となるものだった。発表後、英語教員を目指す大学生からも勉強になったとの意見があった。

（菊池尚代・青山学院大学）

#07. 研究発表 10:45～11:15

Assessing ELF Knowledge and Skills in a CLIL Classroom Context

Nakamura, Yuji (Keio University)

Murray, Adam (University of the Ryukyus)

本発表では、教室における CLIL の実践において ELF の知識とスキルをどう評価するかについて、研究報告がなされた。発表者の授業のねらいはアウター・サークルやエクспанディング・サークルで使用される英語の多様性について学生の認識を高め、多様な活動によってリスニング・スピーキングのスキルを高めることであった。学生は英語の多様性について肯定的な評価を下しており、評価ツールや波及効果の妥当性が検証された。

（佐竹由帆・駿河台大学）

#08. 実践報告 11:20～11:50

日本の大学生のための CLIL 教材開発：世界遺産 CLIL Materials Development for Japanese University Students: The World Heritage Sites

笹島 茂（東洋英和女学院大学）

仲谷 都（東洋英和女学院大学・非常勤講師）

油木田美由紀（東洋英和女学院大学・非常勤講師）

小杉弥生（東京女子大学）

本発表では、発表者が開発した CLIL の教科書『CLIL World Heritage』（三修社）の特徴が説明された。興味あるインプットにより学習の動機づけを行い、簡単な会話・一目でわかるフローチャートや地図を使用するなど足場かけの工夫をすることにより学習者の理解を促進した。具体的に

授業でどのようにこの教科書やワークシートを使用して教えているのか、学生の反応と新たな課題についても提示された。

(佐竹由帆・駿河台大学)

#### #09. 研究発表 09:30～10:00

自己決定理論は L2 動機づけ研究にとって時代遅れなのか？

Is Self-Determination Theory Outdated in L2 Motivation Research?

馬場正太郎 (東京外国語大学・大学院生)

「本当に自己決定理論は時代遅れなのか」という大きな命題に答えるため、自己決定理論を用いた先行研究例、特にテスト観と受験競争観に関わる研究例から利点と欠点を整理し、今後の研究の展望を示した発表であった。フロアから、研究対象を大学生とする場合、受験をしないで大学に入ってくる場合を考慮すべきであること等の助言が寄せられた。

(小屋多恵子・法政大学)

#### #10. 実践報告 10:05～10:35

L2 学習目的、ビリーフ、目標についての母語による深い対話は習熟度が高くない学習者の能動的学修と動機づけをもたらすか

L1 Dialogues on L2 Learning Purposes, Beliefs and Objectives that Generate Active Learning and Motivation for Low-Proficiency Learners

清田顕子 (東京経済大学・非常勤講師)

習熟度の高くない大学生が、さまざまなアクティブ・ラーニングを通して①動機づけ、ビリーフ、行動に変化が起こるか、②能動的学修が身につくか、③英語力の向上は見られるか、の3点について報告したものである。その結果、3点すべてにおいてプラスの効果が見られたことから、アクティブ・ラーニング型授業の意義が確認されたと結

論づけている。

(小屋多恵子・法政大学)

#### #12. 実践報告 11:20～11:50

Students' Reaction to the Duolingo Language Learning App in a University Setting

Isaacson, Jonathan (Tokyo International University)

本発表は、言語学習アプリである Duolingo を活用した指導の実践報告であった。参加者は日本の大学生 22 名で、Duolingo を 1 学期間使用し英語学習を行った。発表では、アプリの特徴や授業での活用法の紹介に続き、3 回の調査で収集された学生たちのアプリの印象や使用状況が報告された。報告後は、限られた時間の中、調査結果や Duolingo の特徴についての質問がなされ、有意義な質疑応答となった。

(藤村朋子・神田外語大学)

#### #14. 関東支部企画ワークショップ 15:55～17:00

ファシリテーション技術に基づくアクティブラーニング型の英語指導ーホワイトボード・ミーティング®を活用してー

Active Learning in Teaching English Based on a Facilitation Technique: Using Whiteboard Meeting®

大場浩正 (上越教育大学大学院)

関東支部企画の本ワークショップでは、ファシリテーション技術としてのホワイトボード・ミーティング®の活用法の紹介と体験が行われた。参加者は A4 版のミニホワイトボードとマーカーペンを持ち、お題が出されると、ペアを組んだ一方が会話をスタートし、もう一方がひたすらホワイトボードに聞き取った内容を書き取り、話が一区切りしたところで、ファシリテーション技術に基づいた質問を次々に加えるという活動であった。

普段、なかなか英語で発話しない学習者であっても、相手に話を引き出されていつの間にか英語を話しているという現象を起こすツールの活用であった。

(佐野富士子・常葉大学)

#### #15. ワークショップ 14:40～15:45

英語教育におけるアクティブ・ラーニングの可能性—ミュージカルを使った英語学習への動機づけと英語表現の定着—

Potential of Active Learning in English Education: Using Musicals to Motivate Learners Towards English Learning and Automatization of English Expressions

河内山晶子 (明星大学)

本ワークショップでは、実際に教室で展開されている「英語ミュージカルを使った授業」が具体的に再現され、受講した学生の生の声が多く開示された。「story/scenario/song の3Sを使って、学習者の head/heart/healthy body の3H が連動した学習を目指す」という理念のもと、まず storytelling が展開され、character の特徴を踏まえて scenario が各々自由に read aloud される。これに自然な action がついて「行動としての英語」が具現されていくという流れであった。

(河内山晶子・明星大学)

#### #16. 関東支部企画ワークショップ 15:55～17:00

アクティブラーニングを促進する協同学習活動

Cooperative Learning Activities that Promote Active Learning

伏野久美子 (東京経済大学)

参加者同士がグループを作るところから本ワークショップは始まった。講師はまず「自分は教育実践において何を一番大切にしているだろうか」という問いかけをして、お互いに語り合い、

刺激し合い、思考を活性化させていった。そしてそのタイミングで、協働学習の理論的枠組みを平易な言葉で具体的に解説した。最後に、講師が実践している授業を視聴覚資料で生き生きと再現し協働学習の効果を実感させてくれた。

(河内山晶子・明星大学)

#### #17. 実践報告 14:40～15:10

Challenges and Possibilities of Group Peer Tutoring: Practical Implications for Implementation of Active Learning

Kodate, Azusa (Kanda University of International Studies)

カリキュラム外で学習支援を提供する「神田外語大学アカデミックサクセスセンター」で2017年度に実施された TOEIC、TOEFL、基礎英語 (Basic English Course) の向上を目指した3つの学習プログラムの実践報告およびプログラム参加者に対して実施されたアンケートの結果報告が行われた。これらのコースでは、2～4年次の学生チューター1名と英語力向上を希望する学生(1～3名)がグループとなり、10週間の協同学習を行う。アンケート結果より、チューターおよび指導を受けた学生ともにプログラムを通しての学習効果や満足感など肯定的な影響が見られた一方で、基礎英語コースのチューターに対し研修の必要性あることが分かった。この結果を受けて、改善策として行われた取組も紹介された。

(川口恵子・芝浦工業大学)

#### #18. 研究発表 15:15～15:45

アクティブラーニングで文法を学ぶ—ディクトグロスを用いた協同学習の効果—

How to Learn Grammar in Cooperative Learning with Dictogloss

山本成代 (創価女子短期大学)

臼倉美里 (東京学芸大学)

授業でのディクトグロス (dictogloss) 活動が英語学習にどのような効果をもたらすのかについて学生の振り返りのコメントの分析を通し報告が行われた。ディクトグロスはディクテーションとして聞き取った内容のメモを元にグループで協力しながらテキストを復元する活動である。この活動を通して学習者は文法力・語彙力・記憶力という様々なスキルを駆使する。特に、意味を復元する過程で文法について活発なインタラクションが起り、通常の形態の授業では難しい文法学習が協同学習を通じたアクティブラーニングとなり、また、学習の動機付けが高められる効果もあることが分析より分かった。授業内活動として終わってしまうことの多いディクトグロスを中間試験にとり入れる試みも紹介された。

(川口恵子・芝浦工業大学)

#### #19. 実践報告 15:55~16:25

学習者と創る異文化適応の英会話授業－聞き取り調査の結果から

Japanese ESL Students Talk about Cross-Cultural Conversation Class They Need

大味 潤 (東京経済大学・非常勤講師)

非言語は、コミュニケーションの中で極めて重要な役割を果たしているものの、外国語教育では軽視されがちである。本発表は、アイコンタクト、ジェスチャー、ポスチャー (姿勢) などの非言語を、英会話の指導にいかにも効果的に取り入れ、異文化理解へとつなげていくかの実践報告であった。また、学生がそうした授業をどう評価しているかについても、アンケートやインタビューを通して、量的・質的分析が行われた。分析結果からは、学生の異文化への気づきや様々なコミュニケーション上の成果が示唆されたが、同時に「みんなと友達になるまでは前に立って発表できない」など、現在の大学生の抱える問題も指摘された。

(藤尾美佐・東洋大学)

#### #21. 実践報告 14:40~15:10

国際ビジネス交渉における英語力とビジネス・センスの相互作用

Synergy Between English Proficiency and Business Sense in International Business Negotiation

戸田博之 (東京大学・大学院生)

ビジネス経験のない大学生・大学院生に、学習言語である英語と母語である日本語で、日常場面とビジネス場面における依頼の e メールを書いてもらい、それを分析した研究発表であった。e メールに現れる「ビジネス・センス」(「相手への配慮」が主たる要素) はビジネスの経験のない被験者にとってはやはり難しいものであったが、どのようにビジネス・センスを育てていくのかなど今後の発展が期待される発表であった。発表後の意見交換も大変活発であった。

(田口悦男・大東文化大学)

#### #22. 研究発表 15:15~15:45

“LINE Study”－自主的な学習の実地

“LINE Study”: Autonomous Learning

木村美由紀

(東京慈恵会医科大学・非常勤講師)

若者の中で広く使用されている“LINE”を使用した writing 課題を、104名の学生を対象に11か月実施した研究報告であった。学生は自発的な参加で、授業評価とは一切関係なく実施された。発表者からの、丁寧で、ポジティブなフィードバックや励ましを受け、課題を最後まで終えた学生は49名を数えた。学生と発表者のやり取りはすべて英語で行われ、“LINE”の持つ手軽さ・即時性、そして学習者と発表者双方の熱意により成功に導かれた研究事例であった。

(田口悦男・大東文化大学)

#23. 研究発表 15:55～16:25

Japanese Learners' Grammaticality Judgment of wanna Contraction

Ito, Yasuko (Kanda University of International Studies)

本発表では、省略形 "wanna" が使用可能な場合と使用不可能な場合の区別につきまして、文法性判断課題を用いて検証した研究が紹介されました。実験により overgeneralization など、発達段階への示唆が得られ、多くの参加者により活発な質疑応答が行われていました。

(多田 豪・東邦大学)

#24. 研究発表 16:30～17:00

ライティング力向上のための品詞認識の重要性とアクティブラーニングを使った品詞理解の取り組み

Scaffolding English Writing Skills by Enhancing Recognition of Parts of Speech Using Active Learning

山科美智子 (埼玉女子短期大学)

本発表では、英語初級学習者に対し、品詞の認識についての教材や指導方法についての発表がなされました。指導の結果としてライティングに多かった品詞のミスが改善され、また学生の活発な取り組みや教材についての好意的な反応が多く聞こえたのが印象的でした。

(多田 豪・東邦大学)

#25. 研究発表 14:40～15:10

日本人大学生の長期留学の成果と課題：事後研修および長期的キャリアにどう結びつけるか

The Gains and Challenges of Japanese University Students through a Long-Term Study Abroad: How to Connect their Outcomes

to their Long-Term Career

藤尾美佐 (東洋大学)

イギリスの大学に1年間留学した大学生5名を対象とした調査の結果を基に長期留学の成果と諸課題を中心に、学生がどのように変化し、また、その要因について具体例をあげ、論じられた。さらに留学後及び、長期的キャリアにどう結びつけるかについての提案が示された。本調査では(1)スピーキング能力(流暢さ)、(2)発話交替と積極的な会話への参画、(3)イギリス文化への適応に注目し、どのように変化したかを検証した。データ収集にあたっては、複数のデータを併用する triangulation 方法を取り、アンケート及びイギリス人母語話者との会話、そして、筆者との日本語によるポストインタビューの方法を取り調査を行った。結果的に、異文化適応の状態を観察し、教室内でのディスカッションでの発言には至っていなかったという点が参加者間の共通課題として浮上した。留学前に必要となる研修や留学後の成果を帰国後、いかに維持し、キャリアへとつなげていくかについての提案が示され、本発表を結んだ。質疑応答では、多くの質問が交わされ、温かい雰囲気の中で聴衆の熱気と高い関心が漲る議論で締めくくった。

(斎藤早苗・東海大学)

#26. 研究発表 15:15～15:45

小学校英語指導者のコア・コンピテンスをめぐって—教職課程調査結果と今後の課題—

Core Competences as Elementary Educators of English: Research Findings and Implications

山口高領 (立教女学院短期大学)

久村 研 (田園調布学園大学・名誉教授)

中等教育対象の『言語教師のポートフォリオ (J-POSTL)』(JACET 教育問題研究会)の自己評価記述文を源泉として開発した「J-POSTL エレメ



ンタリー」を中心に、小学校英語指導者のコア・コンピテンスに纏わる問題について論議された。具体的に、大学の教職課程修了時までには小学校教職課程履修生が身につけておく必要があるコア・コンピテンスを特定するために小学校中学校の連携を考慮に入れた小学校と中学校英語教員要請課程を有する全国の大学における英語教育担当者を対象とした質問紙調査結果についての報告があった。最終的に、小学校英語指導者がかかえる問題点と今後の諸課題が示された。特に、「主体的な学び」の実現に関わる自立学習に課題があることが分かった。「読む活動」の大半の記述文が養成課程に含まれていない。次期指導要領の内容を考慮すると「語彙」や「文化」とともに養成課程で必要な記述文を拾う必要がある。ただし、教育方法の改善や小学校教育における英語教育の意義を考慮すると、養成課程の指導者の意識改革が求められる。究極的には、小学校教員のためのエレメンタリー・ポートフォリオに対する理解を深める必要がある。総じて、活発な質疑応答により白熱した議論へと盛り上がり、聴衆の深い関心を垣間みる発表であった。

(斎藤早苗・東海大学)

#27. 研究発表 14:40～15:10

Discrepancy between Teachers' and Learners' Preferences of Oral Corrective Feedback Types  
Sekine, Yukihiro (Kansai University, graduate student)  
Sano, Fujiko (Tokoha University)

コミュニケーションな英語授業を行っている中、学習者が発する英語に文法的誤りがあったとき、教師による訂正が効果をもたらすためにはどの訂正方法が望ましいのか学習者目線で問題の解答のひとつを明らかにした研究発表であった。日本の大学生による英語習得において、習熟度レベルや海外留学経験の有無によって学習者自身が

希望する訂正フィードバックに違いがあること、また教師が実施する修正フィードバックが学習者の望んでいるものと必ずしも一致しないことが統計的に示された。たくさんの質問やコメントが発せられ、聴衆の訂正フィードバックへの関心の高さがうかがわれた。

(奥切 恵・聖心女子大学)

#28. 研究発表 15:15～15:45

シャドーイング・トレーニングにおける第二言語流暢さ指標と再生率の質的变化

Shadowing Training: Qualitative Changes of L2 Fluency Markers and Rate of Speech Reproduction

村岡有香 (聖学院大学)

本研究は、スピーキング能力を養成する有効な手段としてのシャドーイングに着目し、そのトレーニングが外国語としての英語の流暢さにどの程度寄与するのかについて実践・分析を行った。シャドーイング・トレーニングを目的とした教科書を用いた半期授業において毎回一定時間トレーニングを行い、シャドーイング及び自由スピーキング音声を多角的に分析した結果、発話内容の高度化に加え、音再生能力及び発話速度の向上が見られた。

(佐藤 健・東京農工大学)

#30. 実践報告 15:15～15:45

The Effects of Different Learning Conditions on Vocabulary Knowledge  
Kawakami, Mutsumi (Tokyo Denki University)

本発表では、協同的なタスク (collaborative task) が語彙知識の獲得に与える影響について報告いただいた。調査では、協同的なタスクとして (a) ディクトグロス、(b) 空所補充課題を行ったグループと、(c) 空所補充タスクを一人で取り組

む統制群とで目標語の定着度を比較した。結果として、協同的なタスクは語彙学習を促進し、ディクトグロスを行った実験群が最も成績がよいことがわかった。意味交渉やタスクの特性を中心に考察および質疑がなされた。

(鈴木健太郎・共栄大学)

## 第1回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子(青山学院大学)

2018年7月8日(日)に、神田外語大学4号館第101教室に於いて、2018年度第1回支部総会が開催されました。支部総会では、2017年度事業報告・会計報告、2018年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

### ■2017年度事業報告■

#### I. 大会、セミナー等の開催(1号事業)

##### (1) 支部大会の開催

2017年度は、関東支部担当で国際大会開催のため、支部大会は実施せず。

##### (2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会

場所：青山学院大学

規模：毎回約40名

日時と内容：

- ・平成29年4月8日(土)抱井尚子(青山学院大学)「英語教育研究における混合研究法の可能性」
- ・平成29年9月9日(土)菊池尚代(青山学院大学)「英語を媒介言語とした大学授業の課題と展望」
- ・平成29年10月14日(土)馬場哲生(東京学芸大学)「英語教員の養成・研修コア・カリキュラムの開発：目標と課題」

・平成29年12月9日(土)飯田敦史(群馬大学)  
「自己表現力育成のための英語ライティング指導：英語俳句を用いての実証研究」

・平成30年1月20日(土)山本志都(東海大学)  
「コンテキストがもたらす異文化的状況から見る異文化コミュニケーション」

#### (3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

場所：青山学院大学

規模：毎回約40名

日時と内容：

- ・平成29年5月13日(土)柴田真一(目白大学)  
「英語運用力向上の秘訣」
- ・平成29年6月10日(土)田中茂範(慶應義塾大学)「英語教育の条件：authenticity, meaningfulness, and personalization」
- ・平成29年11月11日(土)小林めぐみ(成蹊大学)「映画を通して学ぶWorld Englishes」

#### II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行(2号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第5号(英語名：  
*JACET-KANTO Journal*)

日時：平成30(2018)年3月31日

規模：約1100冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第9・10号

日時：①平成29(2017)年10月31日

②平成30(2018)年3月31日

※JACET 関東支部ホームページにpdfで掲載

(3) JACET 関東支部創設10周年記念誌の刊行

日時：平成29年4月1日

発行部数：1200冊

#### III. その他(5号事業)

##### (1) 支部総会の開催

名称：2017年度第1回、第2回関東支部総会

日時：①平成29(2017)年6月10日(土)

②平成 29 (2017) 年 11 月 11 日 (土)

場所：青山学院大学

目的：①2016 年度の支部の事業報告、会計報告  
2017 年度の支部の事業計画

②2018 年度の支部の事業計画、予算案お  
よび人事案の審議

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 29 年 4 月 8 日、5 月 13 日、6 月 10  
日、9 月 9 日、10 月 14 日、11 月 11 日、  
12 月 9 日 平成 30 年 1 月 20 日

場所：青山学院大学

## ■2018 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

(1) 支部大会の開催

日時：平成 30 (2018) 年 7 月 8 日 (日)

場所：神田外語大学

規模：約 350 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET  
関東支部共催講演会

日時：平成 30 (2018) 年 4 月、9 月、11 月、12  
月、平成 31 (2019) 年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 30 (2018) 年 5 月、6 月、10 月の 3  
回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 6 号 (英語名：  
*JACET-KANTO Journal*)

日時：平成 31 (2019) 年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 11・  
12 号

日時：①平成 30 (2018) 年 9 月 30 日

②平成 31 (2019) 年 3 月 31 日

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に  
関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

III. その他 (5 号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2018 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 30 (2018) 年 7 月 8 日 (日)

②平成 30 (2018) 年 11 月 10 日 (土)

場所：神田外語大学・青山学院大学

目的：①2017 年度の関東支部の活動、会計報告、  
および 2018 年度の関東支部の活動計画、  
予算案および人事案を示す。社員選挙につ  
いての説明を行う。

②2019 年度の関東支部の活動計画、予算  
案および人事案の審議・承認を行う。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 30 (2018) 年 4 月、5 月、6 月、9 月、

10月、11月、12月、平成31(2019)年1月、3月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

### 月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代（創価女子短期大学）

月例研究委員会副委員長

奥切恵（聖心女子大学）

辻りこ（神田外語大学）

### ■2018年度上半期活動報告■

2018年度上半期は、5月、6月の2回にわたって月例研究会を開催した。5月12日に宮原万寿子先生（国際基督教大学 課程准教授）、6月9日に萱忠義先生（学習院女子大学教授）をお招きした。両先生のご発表とも内容の濃い充実したものだった。宮原先生のご発表は、ナラティブ分析に関して、ご自身の研究事例も踏まえて聴衆にわかりやすいように説明された。萱先生ご発表には40名近くの参加者があり、萱先生様々な教授経験に裏打ちされた説得力のあるご発表に魅了された。ご発表後も多くの質問が会場から出され、質疑応答からも得るものが大きかった。参加者も具体的な学習法へのヒントなどを得て、大変有意義な時間を持てたと言えよう。各先生方のご発表内容に関しては、後述の月例研究会報告詳細を参照。

### ■2018年度下半期活動計画■

2018年度下半期は、10月13日（土）にトム・ガリー（Tom Gally）先生（東京大学教授）をお招きして、「今後の悉皆（しっかい）英語教育」という題目でご発表をお願いする。聖心女子大学 聖心グローバルプラザ（4号館）2階4-2教室にて16:00~17:20開催予定。

山本成代（創価女子短期大学）

### ■月例研究会5月報告■

日時：2018年5月12日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）10階第18会議室

題目：言語教育におけるナラティブ分析

講師：宮原万寿子（国際基督教大学）

本講演では、主として言語教育におけるナラティブ分析の方法論について語られた。まずはナラティブとは何か、という問いかけから始まり、特に研究者の批判的・内省的思考の重要性についての説明があった。reflection と reflexivity の違いについても触れられ、reflection が‘thinking about something after the event’を意味するのに対し、reflexivity は自分の立ち位置（positioning）を踏まえ、自らが自分と向き合う「内省」と‘ongoing self-awareness’を含むと解説された。さらに、内省的思考理論と研究手法への取り入れ方が説明され、取り入れ方によって、研究結果が豊かな産物となることが示された。宮原氏の実際のナラティブ研究事例も示され、内省的思考がどのように研究プロセスに取り入れられ、研究者自身のアイデンティティがどのような影響をもたらすかということが、わかりやすく語られた。

研究者の内省的思考がリサーチクエスションと方法論及び分析結果の全てに影響し、その解釈は多様であり、またそれが研究の深さに繋がることも語られた。事例などにも言及があり、多くの過去研究についても知識共有され、内省的思考を取り入れることにより、他の方法では見えてこないような分析結果を得られることが説明された。質的研究に興味を持つ研究者にとって、貴重な情報が語られ、聴衆からも活発に質問や意見が出て、大変興味深い研究会となった。

（奥切 恵・聖心女子大学）

## ■月例研究会 6月報告■

日時：2018年6月9日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）9階第16会議室

題目：「英語4技能試験に求められる語彙知識と語彙学習法」

講師：萱 忠義（学習院女子大学）

近年グローバル化が進み、英語でコミュニケーションを取る必要性が高まってきている中、文部科学省は「学習指導要領」において、小中高を通し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の英語4技能の育成を目指すということを明記している。このような流れを受け、本講演では、日本の小中高の英語教育の現状を概観した後、4技能で求められる語彙学習とは何かという問いから、具体的な語彙指導方法まで明示していただいた。

まず、現在の小中高の英語教育において、今後特に「話す」「書く」という力を育成することが必要になっているが、文部科学省の平成29年度英語力調査の結果を見ると、実際の高校生の英語レベルは、この二つの技能においてはかなり低い状況にあるということが説明された。その原因の一つとして挙げられるのは、「使える」語彙（発表語彙）の量にあるのではないかと示された。また、英語教育現場において、語彙の提示および語彙テストは多くの場面でなされているが、実際のところ、学習者にとって使える語彙になっているのが問題であると指摘された。語彙学習には、具体的には単語のスペルや意味以外にも、音声、発音記号、品詞、原義、同義語、対義語、関連語、コロケーション、文法的機能、言語使用域などの学習をも含むという事がさまざまな例とともに提示された。

その上で、今後私たち英語教員は、単語帳などで集中的に学習を進める「意図的語彙学習」と、コンテクストがある中で自然と語彙を学習していく「付随的語彙学習」の2つの方法を併用して

いくことを、学習者に対して促す必要があると概説いただいた。具体的には、学習者の英語語彙レベルにあった英英辞書の使用や、コーパス言語学の活用、text-to-speechというテキスト読み上げシステムの使用、そして、聞こえてくる英語の要点をメモに取り、話全体を復元するディクトグロスという手法を授業内に取り入れていくことなどの方法が示された。そして講演会全体を通し、今後は特に、学習者の理解語彙知識だけではなく、発表語彙知識も高めることが大切であるということが示唆された。質疑応答では、小学校での語彙学習についてなどの質問が多く出たりと、聴衆の関心の高さが見受けられた講演であった。

（辻りりこ・神田外語大学）

## 青山学院英語教育研究センター・JACET

### 関東支部共催講演会報告

支部研究企画委員

飯田敦史（群馬大学）

支部研究企画委員

辻りりこ（神田外語大学）

## ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第1回）報告■

青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会

日時：2018年4月14日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学17号館17307教室

題目：「J-POSTLを活かした英語教員養成」

講師：清田洋一（明星大学）、吉住香織（神田外語大学）

本講演では、JACET 教育問題研究会における一連の研究テーマから、現在行われているJ-POSTL 教職課程活用プロジェクトの一部が紹介された。JACET 教育問題研究会では、これま

で教師の授業力の省察ツールである J-POSTL の開発と活用方法の研究に取り組んできた。

教職課程活用プロジェクト発足の背景には、J-POSTL を効果的に活用し、教職課程の教育の質を上げ、卒業後も学生が自律的に学ぶことができる教員養成が不可欠であるという考えがあった。そこで、「CEFR の理念と Can-do の意義」、「J-POSTL の活用方法」に関して理解を図り、グローバル市民を育てる言語教師のために、J-POSTL を活用した教員養成課程の授業例を提案、実施、活用方法を共有し、最終的には「J-POSTL 活用事例集：基礎編、応用編」を発売することを目標に掲げた。この目標に到達するために、J-POSTL を教職課程で活用している大学教員を中心とした研究会において、教職課程の授業場面や指導法をとりあげながら論議・研究を進めてきている。

こうしたプロジェクトの背景・理念・目標を踏まえ、本講演では、英語教員養成課程における J-POSTL を活用した 3 つの実践例が報告された。英語科教育法における J-POSTL 活用サイクルとして、「準備」、「導入」、「模擬授業への活用」、「教育実習への活用」、「全体振り返りと今後の課題」の 5 段階があり、1 つ目の実践例では、年度当初と年度末の「自分自身について」の使い方、2 つ目の実践例では、前期・後期の各模擬授業での「自己評価記述文」の使い方、3 つ目の実践例では、教育実習への活用を対象とした「自己表現記述文」の使い方が紹介された。発表者からは、学生が自らの課題や成長を俯瞰できる『自己評価記述文一覧表』と共に、実際に履修者が作成した振り返りのレポートが提示され、J-POSTL で使用されている項目や記述が学生のレポートの中でも頻繁に使われていることが報告された。また、J-POSTL を用いた省察を通して、履修者が授業力に対する理解を深め、さらに前期の学びが後期の学びにもつながっていることから、教職課程における J-POSTL の有効性が確認できた。

教育現場では、J-POSTL はチェックリストとしてではなく、「自己成長ツール」として使用することが重要である。J-POSTL は様々な可能性を秘めており、教育実習の際に、J-POSTL を積極的に導入することで、教育実習生がどのように授業準備・実践をしたらよいかという指標になる一方で、若手教員においても、どのように授業を実践したらよいかという方向性が判断できる支援ツールになることが理解できた。講演中、聴衆からも J-POSTL 使用する際の自己評価記述文の選び方、自己評価記述文選択時の留意点、初等教育における使用可能性などの質問が挙がり、J-POSTL に対する関心の高さが伺える講演会となった。

(飯田敦史・群馬大学)

#### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第 2 回）報告■

日時：2018 年 9 月 8 日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学 14 号館（総研ビル）9 階第 16 会議室

題目：「英語アカデミックライティングとプレゼンテーションのデータ収集・分析法—研究と教育に役立てるために—」

講師：奥切 恵（聖心女子大学）

現在、英語教育において、ライティングの指導や、プレゼンテーションの指導というのは多くの教育現場でなされてきているが、四技能の指導に加え、談話能力といった語彙や発音、文法、社会言語能力に関する教育も大切である。そうしたことを踏まえ、本講演では、奥切氏が実際に国内外で経験したライティングコーパスの構築の実施について概説いただき、その上で、そこから得られたデータを利用した研究を紹介いただいた。

まず、ご講演の前半では、国内外の学習者から得られたデータを用い、The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College

Students (MOECS)というアカデミックライティングコーパスの構築過程を概説いただいた。主に、本コーパスデータは、①英語圏で大学に通う英語と日本語を母語としている学生の英語のエッセー (L1) データ、②日本人学生の英語 (L2)のエッセーと日本語を L2 として学習している学生の日本語のエッセー (L2)を収集したと報告された。収集に当たっては、倫理審査を通し、参加者の言語教育についての経験に関する質問紙を作成し、その後、実際にデータ収集やデータチェック、そしてデータの公開を行ったとのことで、全ての過程において研究協力者との連携が改めて大切であったことが明示された。ご講演の後半では、今回ご紹介いただいたライティングコーパスを用いた研究の分析について報告された。その分析結果によると、英語母語話者の英語の使用と、英語非母語話者の英語の使用で、例えば、”for example” と ”I think”、そして “reason” の使用において違いが、各言葉の機能において表れているとのことである。

今回は、ライティングのデータに関して主にお話いただいたが、本研究は、プレゼンテーションの指導や研究においても多くの教育的示唆を含むものであると考えられる。英語ライティングコーパス研究の具体的な方法と結果が示された本ご講演は、英語教員にとってライティングコーパス研究の概観を理解することが出来たと同時に、教室内での英語ライティング指導についても改めて振り返る貴重な機会となった。

(辻りりこ・神田外語大学)

### 支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長  
伊東弥香 (東海大学)

本年度は第 6 号の発行準備を進めています (2019 年 3 月発行予定)。例年通り、7 月 20 日

に応募原稿を締切り、査読者の選定を経て第 1 次審査 (8 月～9 月) が進行中です。今後、年内に審査 (10 月～12 月) を終了し、採択論文の編集・校正作業 (1 月～2 月) が続きます。

第 6 号の原稿募集にあたっては、試行錯誤を繰り返してきた過去の経験を活かし、大きく次の 3 点を実施しました。

#### (1) 投稿規定の改定

第 6 号より投稿枚数制限を A4 サイズ 15 枚から 20 枚に変更しました。支部ニューズレター10号にてすでにお知らせしましたが、質的研究による論文の投稿が増える現況等にも鑑みて、投稿者のニーズに少しでも応えることを目的としています。なお、日本語、英語によって異なるため、字数制限ではなくテンプレート使用をお願いしています。

#### (2) 原稿募集

5 月に、紀要投稿のための詳細情報 (論文種別、審査評価項目、紀要で扱う主な専門分野、スケジュール、投稿規程、日本語テンプレート、英語テンプレート) を支部ウェブサイト *JACET-KANTO Journal Vol.6 Call for Papers* (<http://www.jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>) にアップしました。また、支部大会プログラム、支部会員 ML を通して告知しました。

#### (3) 査読システム

「査読システム (peer review system)」を用いて、第 6 号も投稿原稿の審査をスムーズに行っています。本システムでは、査読者の事前登録を行い、応募原稿の分野や内容に最も適した査読者を迅速かつ効率的に選定することができます。この作業を第 5 号からオンライン化したことにより、さらに査読候補者と紀要編集委員会の双方にとって、作業の効率化・簡素化を進めることができました。査読者への登録依頼の際には、当該年度の予定スケジュールをお知らせした上で、査読承諾の有無を事前に確認させていただ

いています。承諾者の中から査読者を選び、後日、正式依頼をするという手順です。

7月20日(投稿締切日)は学期中であるため、投稿者にとっては難しいスケジュールであろうという懸念もあります。しかし一方で、査読者の方々には大学の夏期休業期間中に時間を十分に取っていただけるというメリットがあり、その点を重視しています。そのため、応募原稿の採択可否のみではなく、質の高い学術論文を書くための助言や改善点など、査読者には教育的な指導をお願いしています。それが本当の意味での peer review であるという考えのもと、当委員会ではその支援のお手伝いをしています。

紀要編集委員会メンバー：伊東弥香(委員長)、今井光子(副委員長)、大野秀樹、奥切恵(副委員長)、小田眞幸、熊澤孝昭、鈴木健太郎、武田礼子、多田豪、濱田彰、古家貴雄、Chad Godfrey、Paul McBride(敬称略 50音順)

### 事務局だより

支部事務局幹事

高木亜希子(青山学院大学)

### ■月例研究会及び青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会開催のお知らせ■

下記のとおり、月例研究会及び共催講演会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

#### (1) 2018年度月例研究会

日時：2018年10月13日(土) 16:00-17:20

場所：聖心女子大学聖心グローバルプラザ(4号館) 2階 4-2 教室

題目：「今後の悉皆英語教育」

講師：トム・ガリー (Tom Gally) (東京大学)

#### (2) 2018年度後期の開催予定

・2018年度第3回共催講演会

日時：2018年11月10日(土) 16:00-17:30

・2018年度第4回共催講演会

日時：2018年12月8日(土) 16:00-17:30

・2018年度第5回共催講演会

日時：2019年1月12日(土) 16:00-17:30

### ■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、[JACET 本部事務局](#)へ住所変更届けを提出してくださいませよう、どうぞよろしく願いいたします。

### *JACET-Kanto Newsletter* 第11号

発行日：2018年9月30日

発行者：JACET 関東支部 (支部長 木村松雄)

編集者：佐野富士子、下山幸成

斎藤早苗、川口恵子、長田恵理

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内